

(Lonely Night Gathering)

さみしい夜の句会報 第266号 (2026.3.22-2026.3.29)

参加者：クイスケ、七澤銀河、胡椒黒、しまねこくん、笛地静恵、蔭一郎、カ

オルル、山田真佐明、大山 晶子、桑原雅、西脇祥貴、輪井ゆう、石

川聡、月階柚、岡村知昭「Naktraucherei」、鈴木正巳「なすわん」、汐

田大輝、田中美蟲角、詠んでみた水草、雨声、東ころろ、水の眠り、

雷(らじ)、あづみのマルコ、安藤蜜豆、三明十種、鯖詰伍太郎、空野

つみき、白水ま衣、まどけい、天然石アケセサリ「石」s、雪夜替星、

真白、織部ゆい、²⁰²⁶、季川詩音、宮坂愛哲、つきのさかな、高田つ

き、ふくろうたかこ、よもやまさか、月波与生(四四名)

◆川柳・俳句

回復の口の部分に手折られる クイスケ

子を持たず人を愛した雌ライオン 七澤銀河

ブラジルを纏って眠る九官鳥 七澤銀河

呑み過ぎた象が夜道を通ります 七澤銀河

とおまきに骨伝導の蚊の翅音 蔭一郎

にくづきの風に関するいいつたえ 蔭一郎

舌の根の生存率を織りませる 蔭一郎

日時計に草冠の夕まみれ 蔭一郎

《ドトールの窓に二重人格せよ》 胡椒黒

こだまするイタリアの大理石だよ 胡椒黒

会える御影石会えない御影石 胡椒黒

自転車は春田へ落ちてゆくところ カオルル

それを云つたらおしまひのパンジー咲いてゐる カオルル

「うどんにも喜怒哀楽のある四月」 岡村知昭

屋上の鰯の花子の墜ちたがる 岡村知昭

「ページ埋めたダークマター払う 輪井ゆう

パンジーを三軒隣まで逃がす しまねこくん
たんぽぽになつたら忘れられるかな しまねこくん
ひと文字も浮かばないまま沈む月 安藤 蜜豆
転ばぬ先の杖の古傷 白水ま衣
おへソから蜜のしたたるヨガ行者 汐田大輝
うどんにも喜怒哀楽のある四月 汐田大輝
国連の未来が溶けたレモン水 汐田大輝
生真面目な造花が眠るための部屋 空野つみき
睡眠のない星にある美術館 空野つみき

*

ズドラストヴィーチェ叫んでマダム泣く 山田真佐明
吾刺す君の溜息の切先 桑原 雑
御浜 半分だけの中島みゆき 西脇祥貴
どうなつてもどうあつてもどーなつ 石川 聡
忠臣蔵を掛けて寝る NIchtraucherchen
句を作る傍に小さきやせ蛙 田中美蟲角
春炬燵うらぶれてみる Enla 詠んでみた水草
会えた日は桜に染まるリンドール 東ころろ
浄土でもラーメン食いたやお中日 田中美蟲角
酷くずれ緋木瓜秘めたる陽のひかる 三明十種
春宵に つまみも選べぬ ボロダヌキ 鯖詰田太郎
おい、おまえ わたしを無駄にするな。天然石アクセサリ

—kiki's

無いものに風味を残す桜館 雷(らい)
いつもより余計に酒を飲み川柳 まどけい
夕焼けの 孤独、凍て空夜闇行き 雪夜替星
春雷や病臥の臉少し揺れ 真白
抗米のその先にある春の野か 季川詩音
いちじくのいろのみず 高田つき
無いものに風味を残す桜館 雷(らい)
いつもより余計に酒を飲み川柳 まどけい

* 助動詞のほとりを濡らすラブドール 月波与生

◆ 短歌

定型と破調の間には羽化したばかりの薄緑色の蟬がいるとか、そういう事を話したいな。誰かと。川瀬十萌子
許してねもう会わないと決めたこと人魚なりに海に行くこと つきのさかな

*

そしてまたいかねばならぬ春惜しむ 帰るとはゆくことだから夏近し 笛地静恵

鹿なんかどこにいたっていいでしょう鹿は鹿のまま生きたいねん 大山晶子

花筏 鳥が帰り行く空を后が淡く渡りて消ゆる 月階柚
泣きたくても泣けなくて泣きたくても泣きたくないけど泣きそうになる なさわこ

本当に私が在ったその夜冬の寒い駐車場 雨声
感情が騒がしくなる君といて醒めた物理のことわり探す
水の眠り

踊り場は時間の継ぎ目 ほどけずに息をひそめて触れた指
先 あづみのマルコ

◆ 詩・短文

束ねた紙に肘をつく
朝を待つ机
グラスが置いてある
半分減った野菜ジュースの

縁の黄色は
乾いたあと

朝焼け前に
言っておかないと
いけない気がしたから
机の前で
紙の上にそれを書こう

雀が山の向こうの
朝をさええずって
この身体もペンもグラスも
跡形もなく消えるから
朝焼けだけが永遠になる（山田真佐明）

◆作品評から

たんぽぽになつたら忘れられるかな　しまねこくん
　　ゝたんぽぽになつて詠んでる自由律曼珠沙華ならちよ
と重い（よもやまさか）

うどんにも喜怒哀楽のある四月　汐田大輝
　　ゝうどんを啜り、噛んで、飲み込む。その動きのひとつ
ひとつに、その人の喜怒哀楽が見える。四月だからだろう
か。うどんの1本、出汁の一滴から、そのうどんの、その
出汁の喜怒哀楽が透けて見える。四月だからだろうか、春
だからだろうか。（岡村知昭）

どうなつてもどうあつてもどーなつ　石川聡
　　ゝどうなつてもどうあつても　の部分にただならぬ覚

悟を感じます。ドーナツを食べるのに何故そのような覚悟が必要なのか、分からないと言いたいところですが、分かるような気がしません。(雷)

国連の未来が溶けたレモン水 汐田大輝

「これは、レモン水だけに、とある議決において「さんせい」が多かったのではないのでしょうか。(季川詩音)

どうなつてもどうあつてもどーなつて 石川聡

「どうなつてもどうあつても」の部分にただならぬ覚悟を感じます。ドーナツを食べるのに何故そのような覚悟が必要なのか、分からないと言いたいところですが、分かるような気がしません。(雷)

尻濡れてからが楽しき潮干狩り 鈴木正巳

「十三湖では蜆採りが解禁になる夏、大勢で賑わう。確かに「尻濡れてからが楽しき」である。子ども達は蜆採りに飽きて泳いじゃうからね。(月波与生)

とろろ吸うマダムの口で嘘をつく 山田真佐明

「マダム川柳を書けば宇能鴻一郎ばりにうまい。小さくてのナンバーワンを取れる領域です。個性を大切に。(月波与生)

(月波与生)

やわらかき音叉の回廊に葦 蔭一郎

「体調がいいのか最近絶好調！」(月波与生)

スローな武士の巻き戻し Nichtraucherchen

「スローなブギにしてくれ」だよね、元は。いわゆる「命みじかしタスキに長し」系の言葉。面白い。(月波与生)